

はじめに

昨年四月より「地域文化調査」という科目が、改組でできた地域学部地域文化学科の必修科目として始まった。この調査には四つの班が設けられ、無駄安留記隊はそのひとつである。隊の目的は、幕末から明治初頭の鳥取で成立した地誌である『無駄安留記』をめぐる調査であり、本年度は上巻および補遺の中から邑美郡（現在の鳥取市中心部とその周辺）に関する部分をとりあげ、現地にも出かけるなどさまざまな活動を行った。本冊子に掲載したのは、一年間の無駄安留記隊の調査報告（第一部）と、活動記録（第二部）である。無駄安留記およびその著者である米逸処についての説明は、付録として転載した「鳥取の隠れ名所」の第一回・「はじめに」（五九頁）の田中先生による紹介を参照してもらうこととし、ここでは無駄安留記の構成について少し述べてみたい。

無駄安留記・上巻は養寿院から始まり、愛宕山金剛院、半日亭（付録）、荒神社と続く。これらはどれも鳥取市湯所にあるが、この最初に何カ所も書かれている湯所こそ、逸処が住んだ地だと想定し、以下を続けたい。湯所の次には円護寺村の大石（付録）や時雨亭（付録）、吉川氏古墳が取りあげられる。円護寺村へは湯所から、今ならトンネルでつながり、昔も道祖神札を越えればすぐだった。また石山や善久寺秋葉大権現とともに描かれている八幡池も湯所に隣接し、いわば逸処の散策の圏内である。以上が「湯所周辺」の部である。

次に筆者は、摩尼山へと出かける。戦場ヶ平鴨尾（丸山）に始まり、道中の念仏橋、覚寺村の五智庵や狼庵、栗餅屋（付録）、山道の中程の継子落としての滝と、摩尼道沿いのスポットを取りあげながら摩尼寺に到着する。まずは寺に詣でたあと、寺の奥の山中にある峯の立岩、奥の院まで足を延ばす。帰り道には、摩尼寺から湯山へ抜ける山道沿いの児ヶ松に寄り、最後に門前の源兵衛茶屋で食した田菜の「悪口」まで書きしるした。ここまでが「摩尼山詣」の部である。第三部では、浜坂村の代々山の麓の大応寺と、その前を流れていた千代川中の弁天島に触れたあと、さらに河口方向に進んで荒神山の麓で釣をする絵を描

く。いわゆる「浜出」とは荒神山の先の十六本松に出かけることで、この辺りは古くから行楽地であった。釣のあとは砂丘に向かったのか、但馬往来浜通り脇の大井古・子井古と柳茶屋が取りあげられている。この部分が「浜出」の部である。上巻の邑美郡の最後は多鯨ヶ池である。この池を筆者は但馬往来山道通りにあたるぼじ坂から見ているので、これは浜出の続きではなく、別に訪れたものだろう。ちなみに多鯨ヶ池のその次に取りあげられるのは、ぼじ坂を越えた湯山にある湯山池で、さらにそこから駟馳山峠を越えて浦富へと進んでいく。この遠出の最初として書かれたのが多鯨ヶ池なのだろう。

以上、無駄安留記・上巻の邑美郡の部分は、①湯所周辺、②摩尼山詣、③浜出の三部から構成されていて、その後には④岩井方面への小旅行と続く。つまり、無駄安留記・上巻は地誌でもあるとともに、今で言うならば自宅付近の散策アルバム（絵が写真の代わり）だったり、お寺参りや行楽のアルバムだったのでないか。このように考えれば、立ち寄った先で酒を汲んだことがくりかえし書かれていることも、田菜の悪口も、納得ができるのである。

一方、無駄安留記・補遺では、上巻とは異なり、取りあげられている名所・旧跡が、逸処が実際に歩いた順に並べられているわけではない。まさに上・下巻で取りあげなかった箇所を雑多に並べた「補遺」のように見える。また、資料も少なくよくわからない楓亭を例外として、取りあげられているほとんどに共通する点は、それぞれ立派な故事来歴が伝わっている、まぎれもない「名所」であることである。太閤ヶ平、観音院、芳心寺、樽谷神社、興禅寺、犬橋・犬塚、元交が入戸、桂蔵坊・山伏の井戸、鼠倉、道光坊墓、田ノ嶋村・毘沙門堂などで、これらの記述にはほかに書かれていることが引用されていることも多い。その他の部分も、狂歌はあるものの、いたってまじめになっってくる。これが幕末から明治にかけての約一〇年間の逸処の変貌なのだろう。

（地域文化学科教員 茨木透）